

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：心理・社会福祉学科

資格：教授

氏名：萱村 俊哉

研究分野	研究内容のキーワード
発達神経心理学, 臨床発達心理学, 児童発達・臨床, 保健心理学	発達障害, 神経心理学的アセスメント, 発達障害児への学習指導, 協調運動発達, 身体的不器用, 身体図式, 神経学的微細徴候, 人物画, 構成行為, Reyの図, 身体イメージ, 瘦身願望
学位	最終学歴
学術博士, 学術修士	大阪市立大学大学院 生活科学研究科 後期博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 応答的授業の実践	2011年4月～現在	大学の授業は教授者が一方的に話をする場になる危険性がある。応答的授業とは、学生の理解の構造化をはかる目的で、学生に対し定期的に所定の質問をし、その返答内容を適宜くみ上げながら、授業を展開する方法である。
2. 視覚教材の効果的使用	2011年4月～現在	心理学の授業では、文字情報だけでなく、映像などを用いて説明することが求められる。そのニーズに対応した処置である。
2 作成した教科書、教材		
1. 心理検査法の実践説明資料	2015年4月15日	実習「心理検査法の実践」において使用する資料である。知能検査や性格検査の特徴、実施法、スコアリング法などを解説したもの。
2. 心理学概論資料	2012年4月15日	「心理学概論」の授業で使用するために作成された資料である。
3. こども心理学資料	2011年4月15日	「こども心理学」の授業用に用意した資料であり、56ページからなる。
4. 「身体と運動の発達心理学」講義	2010年03月31日	大学院授業「発達神経心理学特論」において使用することを主目的に作成された教科書である。身体的側面から認知発達や精神発達を論じている。
5. 神経心理学資料	2008年04月15日	「神経心理学」の講義の内容を簡潔な文章でまとめた資料を作成し、毎時間それらを配布した。
6. 比較発達心理学特論資料	2007年04月15日	「比較発達心理学」の講義内容を簡潔な文章でまとめた資料を作成し、毎時間それらを配布した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 臨床発達心理士	2003年04月01日	第00204号(臨床発達心理士認定運営機構)
2. 中学校教諭1級普通免許(保健)	1984年03月31日	昭58中1普第4895号
3. 高等学校教諭2級普通免許(保健)	1984年03月31日	昭58高2普第5554号
4. 小学校教諭1級普通免許	1984年03月31日	昭58小1普第1223号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 構成行為の発達と臨床的意義 Rey-Osterrieth複雑図形による検討	共	2014年3月3日	創造出版	萱村俊哉・萱村朋子の2名 描画の構成行為の定型発達特性について整理するとともに、非定型発達や病的所見も吟味しながら構成行為発達の発達臨床への寄与について考察した神経心理学の専門書である。
2. 発達障害親子支援ハンドブック-保護者・先生・カウンセラーの連携	共	2013年6月10日	昭和堂	発達障害をもつ子どもの保護者、教師、カウンセラーに向けて、子どもの行動の理解や関わり方の工夫について具体的に解説した本である。15名の執筆者によるもので、萱村は第4章「発達障害の子のこころ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
3. 教室における「気になる子どもたち」の理解と支援のためにー特別支援教育における発達神経心理学的アプローチ	単	2012年10月	ナカニシヤ出版	」の解説を担当した。pp.102-115 発達障害を含むいわゆる「気になる子どもたち」を理解し、支援するための一つの視点を提供することを目的として、筆者の研究や臨床経験を基に、主に発達神経心理学の立場からまとめた本である。
4. 発達心理学 最新保育テキストブック6	共	2007年03月	聖公会出版	倉戸直美, 成田朋子, 萱村朋子, 萱村俊哉, 水谷孝子ほか 保育学を学ぶ学生のためのテキストである。成田朋子編、倉戸直美監修で、全9章から構成されている。萱村俊哉は萱村朋子との共著で、第3章「胎児期の発達」及び第4章「新生児期の発達」の2つの章を担当した。
5. 発達健康心理学	共	2002年12月	ナカニシヤ出版	萱村俊哉編著(萱村俊哉・小山健蔵・戸部秀文・川端啓之・白瀧貞昭・安藤明人・上野加代子・萱村朋子・後藤晶子・田辺毅彦・小寺清孝) 幼年期から中年、老年期まで、「生涯発達」と「予防」の視点から心身の健康を考えた。萱村は、編著者として、本書を企画するとともに、序章、1章「人間の行動からみた健康」、4章「こころの発達」、5章「胎児の健康と妊婦の心理」、11章「生活習慣病と性格」の5つの章の執筆を担当した(pp.1~18, pp.49~71, p.p.73~95, pp.173~189)。
6. 研修テキスト ホームヘルパー(Ⅱ)ホームヘルプサービスの方法	共	1999年6月	社団法人 長寿社会文化協会	ホームヘルパー養成のためのテキストである。萱村は第8章「高齢者、障害者(児)の心理」の中の「身体障害者の心理」を担当した。(pp.79-86)
7. 環境心理の諸相	共	1999年12月	八千代出版	大学における環境心理学のテキストである。22名の執筆者によって著された。総説、各論、展開に分かれ、萱村は各論の中の「地球環境」の執筆を担当し、とくに人と環境との関係性について論じた。
8. 障害者の心理	共	1999年11月	一橋出版	杉村省吾・本多治・川端敬之・糸魚川直祐・萱村俊哉・遠山敏の6名。 介護福祉士養成のためのテキストである。本書の中で萱村は第4章「学習障害の心理」及び第6章「身体障害者の心理」を担当した。担当(pp.50~68, pp.80~93)
9. 発達の神経心理学的評価ー学習障害・MBDの診断のためにー	単	1997年02月	多賀出版	平成8年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けて刊行した学術書である。大阪市立大学に提出した学位請求論文「神経学的微細徴候の発達に関する研究」、及び平成4年度と5年度に実施された文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「脳機能障害児の神経心理学的研究」の成果を元に体系的にまとめている。発達性協調運動障害(DCD)、学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、自閉症スペクトラム障害(ASD)の診断に欠かせない神経心理学的諸機能の正常基準値を設定するとともに、脳障害児を対象とした神経心理検査の結果についても考察している。(総頁p280)
10. 感情心理学	共	1996年9月	ナカニシヤ出版	米国の感情心理学者 Izard, C.E. の The Psychology of Emotionsの完全訳である。荘厳舜哉を中心に比較発達研究会のメンバーにより訳された。本書は全17章からなり、萱村は第11章の「怒り」の訳出を担当した。(pp.264-295)
11. ライフサイクルからみた発達臨床心理学	共	1995年06月	ナカニシヤ出版	川端啓之・杉野欽吾・後藤晶子・余部千津子・萱村俊哉の5名。 発達心理学を学ぶ学生、及び、発達、教育、臨床についてさらに学ぼうとする人々を対象にまとめられた本である。胎児期から老年期までの発達について解説し、それぞれの発達段階における発達障害とそれに対する臨床心理学的な接近方法についても詳述されている。萱村は「胎児期」「新生児期」および「老年期」の執筆を担当した。(pp.20~50, pp.184~202)
12. 現代健康教育学	共	1992年09月	朝倉書店	坂本吉正、駒井説夫、萱村俊哉の3名。 大学、短大の健康科学関連の講義に使用することを目的に開発されたテキストである。内容は、発育発達、母子保健、精神保健、運動処方等の健康科学分野を健康の増進と疾病の予防という見地から一貫性を持たせてまとめたものになっている。萱村は「母子保健」「神経の機能と健康」「ライフサイクルと精神保健」の3つの章を執筆した。pp.36-121
2 学位論文				
1. 神経学的微細徴候の発達に関する研究	単	1990年9月25日	大阪市立大学	1990年に大阪市立大学に提出、受理された博士学位論文である。健常児(成人)と脳障害児の神経心理所見や神経学的微細徴候(soft neurological signs:SN S)の発達的变化を定量的に検討し、発達障害児にお

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				ける神経機能の診断法としてのSNSの臨床的意義について考察した実証的研究である。(全200頁)
3 学術論文				
1. 身体図式と身体イメージの関係を考える(査読付)	単	2017年3月31日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 18, 1-4, 2017	身体図式と身体イメージという類似した概念間の関係について考察した。身体図式は生理学的で無意識的なプロセス、一方、身体イメージは心理学的で意識的なプロセスと区別できるが、機能的には両者は不可分であり、研究目的によっては、両概念を内包した「身体システム」のようなメタ的な概念を用いた方が適切な場合もあることを指摘した。
2. 「インターネット・ゲーム障害」(IGD)を考える	単	2016年7月15日	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, 24, 12-14, 2015.	近年、中国や韓国などアジアを中心に、インターネットゲームによる心身の障害事例が多数報告されるようになった。インターネットゲーム障害(IGD)はDSM-5にも「今後の研究のため病態」として掲載されている。本稿ではIGDの病態を紹介するとともに、今後、児童期からの予防的介入が求められることを指摘した。
3. 発達障害児の二次障害予防への神経心理学の貢献(査読付)	単	2016年3月31日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 17, 1-8, 2016	発達障害児の持つ行動特性を養育者や教師が神経心理学的に理解することが二次障害発生に至る負の連鎖の防止と発達障害児の健康な自己の獲得の一助になることを論じた。
4. 子どもの連合運動の発達指標としてのFog testとその臨床的適用(査読付)	単	2016年3月31日	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 63, 41-48, 2015	アメリカ精神医学会の診断基準(DSM-5)では、発達性協調運動障害(DCD)の随伴症状として、抑制できずに溢れ出す運動を観察するよう注意を促している。このような運動の一つに連合運動があるが、本研究では連合運動の誘発方法の一つとしてFog testを取り上げ、発達指標としての、あるいは発達障害の臨床診断においての意義について考察した。
5. 情報化社会における子育てとメディアの関係：新聞記事の分析	単	2015年7月31日	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, 23, 27-30(2014)	2003年から2014年までに発表された子育てとメディアに関する新聞記事を分析した。その結果、子育ての情報化における「影」の面を指摘し、注意を促す記事が近年減少していることが明らかになった。
6. 児童期における両側性協調運動の発達と臨床的意義(査読付)	単	2015年3月31日	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編) 62, 31-39. (2014)	両側性協調運動とは上下肢の左右同時の運動のことである。その神経機序は一側性協調運動よりも高次のため、一側性協調運動とは異なる臨床的意義を持つと考えられる。本稿では、ディスレクシアや吃音といった言語機能の検査としての両側性協調運動の意義を論じた。
7. 算数の文章問題の難しさに関する神経心理学的考察(査読付)	単	2015年3月	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要 16, 1-7.	発達障害児の中には、算数の計算はできるが文章問題になると解答できない子どもたちが少なくない。本稿では、このような計算と文章問題の乖離が起きる原因についてジャクソニズムからの説明を試みた。
8. 情報化社会における青年の心理的健康：集団と自尊感情からの考察	単	2014年7月31日	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, 22, 22-24.	ソーシャル・ネットワーク・システム(SNS)の発達により青年の対人関係や心理的健康に現れた変化について、集団と自尊感情の面から素描し、このような状況下における社会的課題を提示した。
9. 教育と発達臨床の場における「臨床行動観察」	単	2014年3月31日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 15, 1-9.	教室やプレイルームにおいて発達の躰が疑われる子どもたちへの関わり方を考案するための基礎データとなりうる行動観察の方法について考察したものである。
10. 原始反射の発達心理学的意義に関する管見	単	2014年3月	人間学研究, 29, 11-18, 2014	原始反射について、従来から指摘されている知的発達のための原初的シエマとしての意義、および生存のための意義という2つに加え、第3の意義として、身体図式の一部として自己の形成の基盤としての意義があることを論じた。
11. 構成行為の発達とその臨床的意義 Rey-Osterrieth複雑図形による検討	単	2014年3月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 61, 53-62(2013)	Reyの図を用いた構成行為研究を概観し、その発達の様相やReyの図検査の臨床的意義について論じた。
12. 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図-ジャクソニズムの立場からの考察-	単	2013年3月31日	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編) 60, 89-94, 2012	近年、自閉症エコラリアは決して無意味な反応ではなく、何らかの固有の意味が存在するとの解釈が一般になっている。また、健常児の1歳代における言語発達において音声模倣が頻繁にみられ、それが、意図的な応答へとつながると考えられる。本稿ではこれらの事実をふまえ、自閉症エコラリアと健常児にみられる音声模倣との異同について、ジャクソニズムの観点から論じた。
13. 発達障害とジャクソニズム(2)-発達障害児の優れた能力の背後にあるメカニズム-	単	2013年3月	人間学研究, 28, 13-20, 2013	発達障害の人が特定の分野において優れた能力をもっていることが多い理由をジャクソニズムの立場から説明することにより、発達障害児の教育や療育において得意なところを伸ばす関わりが重要であることを指摘した。
14. 発達障害の脳科学的解明	共	2012年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター平	白瀧、萱村、宮口、森安、出原、杉浦、沖田 平成19年から23年に実施された発達障害児を対象と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
15. 自閉症エコラリアと健常児の言語模倣における自動性と意図-ジャクソニズムの立場からの考察-	単	2012年3月	成19年～平成23年度私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター研究成果報告書, 31-39 武庫川女子大学発達支援学術研究センター平成19～平成23年度私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター研究成果報告書, 41-46.	した神経心理学的検討の総まとめとその報告である。 自閉症エコラリアが健常児の言語(音声)模倣とどのように異なるのか、また同じところはどのような点かということについて論じた。
16. 小学校3,4年生における人物画の大きさとコンピテンスとの関係	単	2012年3月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 59, 81-86	小学校中学年児童の描く人物画の大きさとコンピテンスとの関係について検討した実証的研究である。
17. 発達障害とジャクソニズム(1)	単	2012年3月	人間学研究, 27, 19-24	ジャクソニズム(Jacksonism)の考え方で気になる子どもたちを観察することにより、彼らの、表面に現れた症状ではなく、本質的な課題に周囲の大人が気付くようになることを解説した。
18. 子どもの手指失認(finger agnosia)検査における性差と左右差	単	2012年3月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 59, 75-79	神経心理検査の一つである手指失認検査における左右差について実証的に検討した。その結果、閉眼で、触れられた指の名称を答える検査では左手より右手のほうが正確であった。
19. 自閉症スペクトラム障害(ASD)における身体図式、ファンタジー、そして自己	単	2012年12月25日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 14, 1-7.	本稿では、自閉症スペクトラム障害(ASD)の人々は特定のキャラクターやストーリーなどのファンタジーを社会的自己として内面化し、それを演じることによってストレスフルな状況を乗り切っているとの仮説を提示した。
20. 発達障害の脳科学的解明	共	2011年3月	文部科学省大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成22年度研究成果報告書, 17-20	白瀧、萱村、宮口、森安、出原、杉浦、沖田 平成22年度に実施した発達障害児の神経心理学的研究のまとめと報告である。
21. 学級における発達障害児支援法「覚え書き」	単	2011年03月	人間学研究, 26, 19-24.	小中学校の通常学級で実施できる特別支援教育のミニマム・スタンダードの具体的内容について詳述した。
22. 女子大学生における人物画の大きさと身体満足度との関係	単	2011年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 58, 93-98.	人物画の大きさという客観的指標が、個人の心理変数と関係があるか否かを調べる目的で、女子大学生を対象に、人物画の大きさと身体満足度との関係について検討した。その結果、身体満足度の下位変数である内臓機能の満足度が人物画の大きさに反映されることが明らかになった。
23. 「片足跳び」検査の意義に関する一考察	単	2011年03月	文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成22年度研究成果報告書, 21-24.	発達障害の早期発見の目的で5歳児検診を実施する自治体が増えてきた。この論考は、「片足跳び」検査が5歳児検診においてももっとも感受性の高い検査であることを指摘したものである。
24. 発達障害の脳科学的解明	共	2010年3月	文部科学省大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成21年度研究成果報告書, 36-38	白瀧、萱村、宮口、森安、出原、杉浦、沖田 平成21年度に実施した発達障害児の神経心理学的検討のまとめと報告である。
25. 思春期における対側性連合運動(CAMs)に関する発達の検討	単	2010年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 57, 69-74.	対側性連合運動の思春期における消失過程についてとくに性差に着目して分析した研究。
26. 自閉症ファンタジーの適応的意味	単	2010年03月	人間学研究, 25, 33-39.	自閉症スペクトラム障害児/者にみられるファンタジー的な言動が単なる症状というだけではなく、適応というポジティブな機能を有していることを指摘した。
27. 手指失認(finger agnosia)検査の左右差	単	2010年03月	文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成21年度研究成果報告書	臨床に資する目的で、健常者における当該検査の左右差について検討した。
28. 軽度発達障害児の行動理解-神経心理学的視点からのアセスメントと教育的支援	単	2009年3月	平成20年度 武庫川女子大学発達支援学術研究センター 研究成果報告書, 147-152.	神経心理学の立場から、軽度発達障害児の行動をどのように理解し、どのように対応すればよいかを解説した。
29. 対側性連合運動(Contralateral Associated Movements;CAM)に関する発達神経心理学的研究-性差及び利き側の違いによる検討	単	2009年03月	文部科学省大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成20年度研究成果報告書, 49-54.	代表的な連合運動である対側性連合運動に着目し、脳梁が成熟するとされる10歳前後の年齢域における対側性連合運動の消長の推移を明確にするとともに、性差や利き側の確立の違い(程度)が対側性連合運動の消長に及ぼす影響について293名の健常児を対象に検討した研究である。
30. 高機能広汎性発達障害の初期発達	共	2009年03月	文部科学省大学学術研	宮口幸治, 白瀧貞昭, 萱村俊哉

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
徴候			究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成20年度研究成果報告書, 44-47.	高機能広汎性発達障害児の幼児期前半における行動特徴について自閉症児群との比較の元に検討した研究である。11歳頃の人見知りや1歳前の喃語の出現など、自閉症とは異なる高機能児ならではの発達特徴がみられたが、反面、興味の限局性や同一性への固執など、自閉症児と同様の特徴も軽微ながらみとめられた。
31. アスペルガー症候群の不器用さに関する発達神経心理学的研究	共	2009年03月	平成19～20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書	萱村俊哉, 白瀧貞昭, 井関良美, 萱村朋子 アスペルガー症候群に特徴的にみられる不器用さがあるのではなかと仮説(解離仮説)を検証することを目指した研究(全42頁)
32. アスペルガー症候群の不器用さにおける「解離仮説」-その概念と研究の意義-	単	2009年03月	人間学研究, 24, 31-35.	筆者のこれまでの協調運動発達に関する研究と軽度発達障害児の不器用さについての臨床経験から、筆者はアスペルガー症候群の人には特有の不器用さ(協調運動障害)が存在すると考えており、これを「解離仮説」と命名している。この論文は、この仮説についての説明、その検証方法と意義について言及したものである。
33. 教室における軽度発達障害児への「気づき」と臨床行動観察について	共	2008年03月	人間学研究, 23, 41-47.	萱村俊哉, 井関良美 筆者の小中学校への巡回相談経験をふまえ、先生や保護者らによる気づきや専門家による臨床行動観察の方法や意義について説明した論説である。
34. Rey-Osterrieth 複雑図形の模写における正確さと構成方略の発達	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編). 55, 79-88	萱村俊哉, 萱村朋子 小学2, 5年生を対象に、Rey-Osterrieth複雑図形の模写及び再生課題を行い、以下の結果を得た。①模写の正確さと構成方略はこの年齢間で明らかな発達を遂げる、②2年では模写の正確さと構成方略間に関連はなかったが、5年では関連が現れる、③模写における交点の描出の正確さは再生の正確さを予測した。
35. 心の理論と社会性	単	2008年	文部科学省大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成19年度研究成果報告書, 35-38.	発達障害領域における「心の理論」の研究史、及び「心の理論」と社会性との関係について論じたもの。
36. 児童養護施設における高機能自閉症スペクトラム障害(ASD)のスクリーニングの課題	共	2008年	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 56, 53-59.	萱村俊哉, 井関良美 3箇所児童養護施設入所児119名を対象に、高機能自閉症スペクトラム障害のスクリーニング(ASSQ-R)を実施し、その評価者間信頼性や課題について検討した研究である。スクリーニング段階で自閉症スペクトラム障害と反応性愛着障害との区別が困難であるなど、いくつかの課題が浮かび上がった。
37. 自閉症スペクトラム児(者)の内的世界—身体イメージとファンタジーから考える	単	2008年	文部科学省大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター平成19年度研究成果報告書, 39-47.	高機能自閉症やアスペルガー障害の症状をもつ人々の内的世界と支援の方法について、身体図式、身体イメージ、さらに彼らが抱くファンタジーの分析を手がかりにして論考したもの。
38. 高機能広汎性発達障害に見られる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究	共	2007年04月	厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の成因の解明と社会支援システムの構築に関する研究」平成18年度研究報告書	白瀧貞昭, 大西次郎, 萱村俊哉, 宮口幸治 乳幼児期におけるHFPDDの予測指標を検索する目的で、母子愛着関係未確立徴候などの自閉症の予測指標を選び、後方視的に検討したところ、当該の徴候を含め、自閉症の予測指標はHFPDDでは必ずしも出現しないことが確認された。
39. 利き手の発達臨床的意義について	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 54, 81-90.	萱村俊哉, 萱村朋子 利き手の判定法、発達過程、規定因、及び発達臨床的意義について論じたものである。とくに、病理的左利き仮説からみて、右利きよりも左利きの人の中に脳障害を負った人が含まれる割合が高いこと、右利きでも左利きでも、脳障害を負った人は非利き手が使いにくいことが予測できることなどを指摘した。
40. 軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究	共	2007年03月	文部科学省科学研究費補助金平成17～18年度(基盤研究(C))研究成果報告書	萱村俊哉, 白瀧貞昭, 萱村朋子, 吉川裕美 軽度発達障害児の神経心理アセスメント法を構築するための基礎研究である。軽度発達障害児と健常児を対象に、身体図式の構成要素である協調運動検査を実施し、軽度発達障害の検査として有効なものを検出するとともに、身体図式の各構成要素の発達過程や要素間の連関を解明することを目的としたもので、全8章から構成されている。(全51頁)
41. 軽度発達障害児における身体図式	単	2006年03月	人間学研究, 21, 1-6.	自己や自己と環境との関連性を理解するための核となる生理機能である身体図式の重要性について、軽度発達障害児のアセスメントとの関連で論じたものである。
42. ADHD児における身体図式と実行機	共	2006年	明治安田こころの健康	萱村俊哉, 白瀧貞昭, 沖田善光, 杉浦敏文

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
能の連関			財団研究助成論文集, 41, 10-18.	アスペルガー症候群の所見と比較しながら、ADHD児における身体図式と実行機能の連関について調べ、併せてADHD児における検査遂行時の脳波特徴についても検討した研究である。
43. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究	共	2006年	厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の成因の解明と社会支援システムの構築に関する研究」平成17年度研究報告書, 130-135.	白瀧貞昭, 大西次郎, 萱村俊哉, 村上凡子 1歳半検診においてHFPDD児を検出することは現時点では困難であること、興味、活動の限局性、強固なマイペース主義的態度の存在に着目すると、2歳半～3歳頃にHFPDD児を早期発見するとは可能であるなどの指摘がなされた。
44. 身体イメージの下位概念の連関：人物画と身体満足度	単	2006年	人間学研究, 22, 27-30.	身体図式と関連の深い身体イメージの2つの下位概念である人物画と身体満足度の連関について、女子大学生148名を対象に検討した研究である。
45. 軽度発達障害児の包括的神経心理検査バッテリーの構築について－神経学的微細徴候(SNS)検査の扱いと評価法を巡って	単	2005年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 52, 85-92.	包括的神経心理検査バッテリーの作成において、神経学的微細徴候(soft neurological signs)検査を含めること、またSNS検査では反応が「陽性」か「陰性」かの二分法的判定だけでなく、その質的側面を神経心理学的に定量的に評価することが有効であることを指摘した。
46. 小学生におけるRey-Osterrieth複雑図形の模写の発達－実施方法の違いによる検討(査読付)	共	2005年	小児保健研究, 64, 693-698.	萱村俊哉, 萱村朋子 発達臨床の基礎資料とする目的で、Rey-Osterrieth複雑図形の模写の発達について、修正及び用紙の移動や回転を認める方法で小学校1～3年生を対象に検討した研究である。
47. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究	共	2005年	厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の成因の解明と社会支援システムの構築に関する研究」平成16年度研究報告書, 103-107.	白瀧貞昭, 大西次郎, 村上凡子, 萱村俊哉 高機能広汎性発達障害児を就学前に早期診断するための基礎研究である。
48. 軽度発達障害児における不器用さ(Clumsiness)の臨床検査法について：神経学的微細徴候(Soft Neurological Signs)の年齢別判定基準を中心に	共	2005年	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 53, 59-72.	萱村俊哉, 萱村朋子 神経学的微細徴候(SNS)の代表的な検査11種類を取りあげ、それぞれの方法、観察点、さらに年齢別判定基準や意義について詳述した。
49. 大学生における性役割意識と身体満足度、及びそれらの関連性についての検討：性差及びスポーツ経験の差に着目して	共	2004年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 51, 67-79.	萱村俊哉・駒井説夫・黛誠 大学生計453名を対象に、性別とスポーツ経験の差の観点から性役割意識と身体満足度、及びそれらの関連性について比較分析を行った研究である。
50. 自閉症者におけるRey-Osterrieth複雑図形の構成方略について	単	2002年	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 50, 65-74.	知的障害のある自閉症者に対してRey-Osterrieth複雑図形検査を実施した。模写の構成方略や変数間の相関において、自閉症者では健常者とは異なった所見が得られた。この点について、実行機能や中枢的統合の観点から考察した。
51. Assessment of Body Image: A Comparison between Self-Rating Questionnaire and Image Drawing Tests.	単	2001年	Japanese Journal of School Health proceedings, 42, 70-71.	ボディ・イメージ評価法の中で、自記式質問紙法と描画法との比較検討を行った。その結果、①描画法である内的身体イメージ描画課題において描出できなかった者は、自記式の身体満足度質問紙の中の身体形態満足度が高いこと、②描画法である自己身体像描画の中で身長を高く描く傾向のある者ほど、身体満足度質問紙の中の内臓機能の満足度が高いことが判明した。
52. ネパール・パタン市児童の人物画－ネパールにおける健康教育モデル構築のための資料として	共	2000年	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 48巻	萱村俊哉・川端啓之 ネパール・パタン市と本邦児童の人物画を比較した結果、パタン市児童の人物画には次の特徴が認められた。すなわち、①10才以上の女子は自分とは反対の性の男性画から描き始めることが多い。②紙面の中心線から上あるいは下の方のずれた位置に人物画を描く傾向は特に高いとは言えない。③写実性が高い。④装飾品の描出及び服装による性差の表現力に優れている。などの諸所見が認められた。担当 (pp. 29～38)
53. 健康小児におけるNeurological Minor Sigus (IV)－就学前児におけるAssociated Movement評価の信頼性に関する検討－(査読付)	共	1999年	小児保健研究 58巻 1号	萱村俊哉・中嶋朋子・坂本吉正 就学前児におけるassociated movements (AM) 評定の信頼性を検討する目的で、就学前児49名を対象に約5ヵ月の間隔を開けて2度、MFTを実施し、評定者間信頼性と再検査信頼性を調べた。その結果、AMの評定者間信頼性は許容範囲以上、再検査信頼性は年長児では許容範囲だが、年中児では不十分であることが判明した。担当 (pp. 43～48)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
54. 健常成人における一側性、及び両側性協調運動に関する研究	単	1998年	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学） 46巻	右利き成人58名を対象に3種類の協調運動検査を実施した。各検査には一側動作（右側条件、左側条件）と両側動作（鏡映条件、非鏡像条件）の2動作が含まれていた。その結果、diadochokinesisにおいて性差や条件差が認められた。（pp. 29～35）
55. 健常児における協調運動の発達とその評価法に関する研究－2種類の評価法の比較－（査読付）	単	1997年12月	学校保健研究第39巻	5～12歳の右利き児合計213名（男子105名、女子108名）を対象に3種類の協調運動検査（finger sequencing, diadochokinesis, heel toe tapping）を実施し、所要時間の測定と運動の正確さ、リズム、随伴運動の出現量のスコアリングの2つの観点から評価を行った。その結果、双方の評価結果間の相関性は全体に弱く、すべての年齢を通して有意な相関は散見されたにすぎなかった。この結果をふまえ、小児の協調運動検査では、双方のタイプの評価法を併用する必要があることを指摘した。（pp. 413～422）
56. Rey-Osterrieth複雑図形における構成方略の評価とその意義（査読付）	共	1997年09月	神経心理学第13巻	萱村俊哉、中嶋朋子、坂本吉正 63名の右利き大学生を対象にRey-Osterrieth複雑図形の検査を実施し、模写の構成方略（Copy-ORG）あるいは模写と再生の正確さ（それぞれ、Copy-ACC, Recall-ACC）に着目した2種の評価法について検討した。両評価法ともに高い評価者間信頼性を認めた。また、全変数に有意な性差はみられなかった。Recall-ACCとの間に有意な相関が認められたのは、Copy-ACC, Copy-ORG, 及びCopy-ORGの中の3つのsectionであった。Recall-ACCを従属変数にした場合、Copy-ORGに強い説明力があり、さらにCopy-ORGの各sectionの中ではS3に最も強い説明力があつた。（pp. 190～198）
57. スポーツ動作とラテラルティの関連性についての調査研究、第1報 大学生を対象として（査読付）	共	1996年08月	学校保健研究第38巻	萱村俊哉、駒井説夫、黛誠 スポーツ経験が豊富な学生とそうでない学生を含んだ492名を対象に質問紙によるラテラルティ（利き側）の検査を行った。その結果、1）スポーツ群は一般群に比べ手や足の両利き傾向が強かった。2）クロスト・ラテラルティの頻度はスポーツ群にとくに高かった。3）ハンドボールやバスケットボールの選手は両利き傾向が強く、サッカー、野球、ソフトボール、バスケットボールの選手は「利き手と利き足」のクロスト・ラテラルティの頻度が高かった。（pp. 285～295）
58. 健康小児におけるNeurological Minor Signs（Ⅲ）－就学前児における顔面部随伴運動の出現率とその方向性－（査読付）	共	1995年01月	小児保健研究, 54, 77-86	萱村俊哉、坂本吉正、川崎美奈子、松宮依子 眼球運動に伴い顔面部に出現する随伴運動や頭部回旋の就学前児における出現率などを検討し以下の知見を得た。1）下顎部や眉の随伴運動は課題の難易度の上昇につれ出現傾向が高まる。2）下顎部や眉の随伴運動の出現率は就学前児でも低率であった。3）頭部回旋と眉の偏りは健常成人でも高頻度で観察された。4）頭部回旋と眼球偏倚の方向はほぼ一致するが、下顎部の随伴運動などでは必ずしも一致しなかった。
59. 側頭葉てんかんにおける視覚性／言語性記憶力比の臨床的応用～側頭葉てんかんの発作起始側性の予測の補助検査として～（査読付）	共	1994年10月	てんかん研究, 12, 221-226.	兼本浩祐、萱村俊哉、林 香織、川崎 淳、河合逸雄 複雑部分発作を示す17例のてんかん患者を対象に3種の記憶力検査を実施した。その結果、言語性記憶力障害の指標としてのAVLTの総即時記憶をReyの複雑図形の即時想起の点数で割った商（Verbal/Visual Ratio : VE/VI）が側頭葉てんかんの病側を最も良く予測することが明らかになった。
60. 健常児における協調運動（motor coordination）の発達に関する研究	単	1994年10月	AUXOLOGY, 1, 22-25.	微細脳機能障害（MBD）の臨床で用いられる神経学的微細徴候（SNS）は、その正常データが不足している。本論文は、Finger sequencing, Diadochokinesis, heel-toe tappingの3種の協調運動検査を計177名の健常学童を対象に実施し、これらの検査所見の正常基準値を設定したものである。
61. 空間認知と大脳損傷側との関連についての検討	共	1993年03月	大阪市立大学生活科学部紀要1992（40）	板垣、坂本、萱村、王 空間認知能力の大脳半球機能を検討する目的で、3～6歳の健常児110名および3～27歳の病院脳波外来患者24名（脳波検査により主な障害半球が判明している患者）を対象に、Block construction testをはじめ計6種の空間認知検査を実施した。その結果、1）健常児の空間能力発達は、4～5歳で「イメージ先行型」の段階があり、その後言語機能の発達が空間発達に促進的に関与していること、2）右脳損傷患者と左脳損傷患者とは、その空間認知障害に質的差異が存在すること、の2点が指摘された。（pp. 127～134）
62. 神経学的微細徴候（soft neurological signs）研究の現状と課題	単	1993年	武庫川女子大学紀要第, 41, 71-78.	近年の神経学的微細徴候（SNS）に関する論文をレビューして、今後の研究のために次の6つの課題を指摘した。1）健常児のSNS研究をすすめてS

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
63. 類人猿の原始反射と発達について	共	1992年03月	大阪市立大学生活科学部紀要1991 (39)	NSの評価方法を確立すること、2) SNSと行動異常や脳の障害部位との関連を調べること、3) 神経心理学的機構に基づいてSNSをいくつかのタイプに下位分類すること、4) 注意機構を調べる検査を確立すること、5) 縦断的なデータを蓄積すること、6) SNSの異常所見を示す小児の精神保健対策を考えること。 坂本、萱村、小野 幼弱ゴリラと幼弱オランウータン（いづれも雄）をそれぞれ生後69日から345日（276日間）と、生後17日から325日（308日間）、原始反射を中心に神経発達の検査と観察を実施し、系統発生の観点から原始反射の発生機序と意義について考察した研究である。原始反射は中枢神経の上位部が下位の神経機構を抑制できずに発現する神経反応であるとの結論に到達した。（pp. 255～273）
64. 脳梁と神経学的微細徴候の関係に関する試論	共	1990年12月	大阪市立大学生活科学部紀要1990 (38)	坂本、萱村、多治見 神経学的微細徴候の理論的基礎として、脳梁研究の現状を述べ、我々が唱えている脳梁抑制仮説と脳梁成熟との関係から、微細脳機能障害と神経学的微細徴候との関連を概説した。（pp. 435～444）
65. 健常児（4～7歳）における手指認知能力と言語、利き手、および巧緻性の関連について(査読付)	共	1990年12月	発達の心理学と医学1990 ; 1	萱村、原、西田、坂本 4～7歳の健常児58名を対象に手指失認検査、言語発達検査（ITPA）、利き手検査、および巧緻性検査を実施してそれぞれの能力の間の相関性を、重回帰分析を用いて検討した。その結果、手指認知能力は言語能力とは関連がなく、巧緻性に関係していること、利き手の発達は巧緻性と関係があること、などが明らかになった。また、手指認知能力には有意な左右差は認められなかった。（pp. 561～567）
66. 健常児における利き手（Handedness）に関する発達の研究—とくにCrossed Lateralityの臨床的意義について—	共	1990年12月	大阪市立大学生活科学部紀要1990 (38)	萱村、坂本 4～12歳の健常児856名を対象に、利き手をはじめ、利き眼、利き耳、利き足といったlateralityの発達の变化やcrossed lateralityの発生頻度などについて検討した。その結果、1) 利き手の発達は4～5歳に著しく進行する、2) 右利き率は女子のほうが男子よりも多く、この傾向は年齢に関係なく認められる、3) crossed lateralityは、幼児期、学童期と通して過半数に発生するため、crossed lateralityそのものにはMBDなどの診断的意義は少ない、4) 利き手と利き足の一致率は他の組合せに比べて高く、両変数間の神経学的関連性が強いこと、などが明らかになった。（pp. 205～211）
67. (博士学位論文) 神経学的微細徴候の発達に関する研究	単	1990年09月	大阪市立大学	健常児および脳障害児でみられる神経学的微細徴候の発達の变化を定量的に検討し、発達障害児の神経機能診断法としての神経学的微細徴候の臨床的意義について考察したものである。（全200頁）
68. 健常児における手指認知能力の発達過程(査読付)	共	1990年05月	小児保健研究1990 ; 49	萱村、橋本、山下、小野、坂本 4～12歳の右利き健常児114名を対象に、4種類の手指失認検査を実施し、手指認知能力の正常発達を検討した。その結果、1) subtestの中でIn-betweenとFinger naming testについては5年生でも不完全であった、2) エラーの分析では環指、中指を中心とした間違いが多い、などが明らかになった。また、sub test間の相関性を年齢別に検討すると、就学前児では言語性検査と非言語性検査との間に高い相関がみられたことから、幼若児では非言語性検査においても言語手がかりを使用している可能性が指摘された。（pp. 354～358）
69. 青年期における健康問題に関する調査研究(Ⅲ) —昼・夜間部学生についての比較—	共	1989年12月	大阪教育大学紀要第Ⅲ部門第38巻2号	上延、山本、光藤、萱村、館林、進 夜間部の学生を対象とした健康調査である。女子大生にみられやすいいわゆる「痩せ願望」は夜間部学生では昼間部学生ほど強くはなかった。日々の食事では「欠食しがち」の者が目立ち、改めて、夜間部学生の食生活上の問題点が浮き彫りにされた。（pp. 169～176）
70. 0、1歳児の鏡像反応の発達	共	1989年10月	大阪市立大学生活科学部紀要1989 (37)	小野、坂本、萱村 大阪市内の0～1歳の健常な保育園児37名を対象に、彼らの鏡に対する反応の発達過程を5カ月にわたって観察した。その結果、1) 5～8カ月では鏡に映った吊り輪を見るが探索しないし、ルージュテストにも関心を示さない、2) 9～11カ月では鏡の吊り輪をみて探す、後方を振り向くことはなかった、3) 12～18カ月では鏡の吊り輪をみて後方を振り返るようになったが個人差が大きい、4) 18～20カ月では鏡をみて、後方の吊り輪のほうを振り返る動作が定着したが、ルージュテストには依然失敗する、5) 20～24カ月で後方の振り返り、およびルージュテストに

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
71. 小児における神経学的マイナーサインの発達過程と診断的意義について	共	1989年10月	大阪市立大学生活科学部紀要1989 (37)	成功する、などの知見を得た。(pp. 245~254) 萱村、埴、豊川、小野、坂本 3~12歳の右利き正常児478名を対象に、片足立ち、片足とび、開口手指伸展現象、指挙上の4種類の運動機能検査を、また同年齢域の右利き正常児143名を対象に左右弁別検査を実施した。その結果、1) 片足立ち、片足とびは4~6歳に速やかに成熟し、片足立ちでは7歳、片足とびでは5~6歳以後に遂行不能である場合に診断的意義がある、2) 開口手指伸展現象と指挙上検査のage-sensitive rangeはそれぞれ4~12歳、4~8歳である。3) 対者(向かい合った人物)の左右を弁別する能力の成熟は5年生でも約50%に過ぎない、ことなどが明らかになった。(pp. 233~243)
72. 健康小児におけるNeurological Minor Signs (II) -利き側別にみたDiadochokinesisとFogs' test - (査読付)	共	1989年01月	小児保健研究1989 ; 48	萱村、坂本 4~5歳(118名)および9~11歳(75名)の正常児を対象に、利き側の違いによって変換運動とFogs' test (強制歩行)の成績がどのように異なるかを検討したもの。その結果、1) 変換運動は利き腕のほうが優れていること、2) 年長児において、随伴運動は利き腕のほうに出現しやすいこと、3) Fogs' testの成績は両利きが最も優れていること、4) 左利きではFogs' testと交換運動による随伴運動の左右差の間には一致がみられなかったこと、の4点が明らかになった。これらの結果をふまえ、主に随伴運動の発生順序の面から考察された。(pp. 52~58)
73. Effect of Prenatal Heat Stress on Postnatal Growth, Behavior and Learning Capacity in Mice (査読付)	共	1989年	Biology of the Neonate. Basel Swiss 1989 (56)	Shiota, K. & Kayamura, T. 胎生12~15日目に母体を通して、42度あるいは43度10分間の高温負荷を受けた仔(ICR系マウス)の生後発育、行動および学習能力を検討したもの。その結果、高温負荷群は対照群に比べ、1) 生後体重増加および11週齢での脳重量減少、2) open fieldでの低活動性、3) water-filled multiple T-mazeにおいて学習能力が低下すること、などが明らかになった。胎生期とくに器官形成期における高温負荷は中枢神経系の発達を形態的、機能的に阻害することが指摘された。(pp. 6~14)
74. AIDSについての学生の知的理解と関心度に関する調査研究	共	1988年12月	大阪教育大学紀要第三部門37巻2号	上延、後藤、萱村、後和、光藤 大阪府下の大学、高校生1、140名を対象にエイズについての理解の程度や関心について質問紙法によって検討したもの。分析の結果、正答率にはかなりのばらつきがみられ、それは関心の高低に依存していることが明らかになった。これらの結果から、学校性教育におけるエイズ教育のあり方について考察された。(pp. 219~232)
75. Practical Use of the Fogs' test in the Preschool Children	共	1988年10月	大阪市立大学生活科学部紀要1988 (36)	Kayamura, T., Sakamoto, Y. & Kaneto, T. 神経学的検査の一種で随伴運動を主な観察点とするMultiple Fogs' test (MFT)を、就学前児45名に実施し、ビデオ分析したもの。就学前児でも検査可能であることが明らかになるとともに、subtest間で難易度が異なること、男女差が存在し、女子のほうが男子よりも成績が優れていることが指摘された。-英文- (pp. 243~248)
76. 健康小児におけるNeurological Minor Signs-Diadochokinesisの定量的検討- (査読付)	共	1988年01月	小児保健研究1988 ; 47	萱村、坂本、多治見、広川 変換運動(Diadochokinesis)の速さ、円滑さの正常域、年齢的变化および左右差を、右利き正常児210名(3~12歳)を対象に検討したもの。ビデオ分析の結果、1) 加齢による発達傾向がみられる、2) 1秒間に4回の運動が可能になるのは12歳以後であること、3) 右腕優位の左右差はすでに3歳から存在していること、4) 同一年齢集団でも成績には個人差が大きいこと、の4点が明らかになった。(pp. 43~48)
77. 胎生期の高温負荷マウスが生後発育と行動発達に及ぼす影響について	共	1987年3月	厚生省神経疾患研究委託事業 発育期脳障害による精神遅滞の本態と発生予防に関する研究昭和61年度研究報告書(86-05-42)	塩田、萱村 妊娠マウス(ICR)に対し、妊娠12~13日目に1日10分間42度または43度の高温負荷を加え、出生仔の生後発育、学習および行動を研究したもの。
78. 青年期における健康問題に関する調査研究(1) -体位、体型および食生活の実態について	共	1987年12月	大阪教育大学紀要第三部門36巻2号	上延、萱村、奥村、小西、駕田、谷口 大阪府下の高校生および大学生計2,194名を対象に体位体型および食生活の実態などについて質問紙によって検討したもの。分析結果から、細長な女子ほどよりスリムな体型を望んでいること、大学生の自宅通学生と下宿生とでは食習慣、栄養摂取両面にわたって問題がみられることなどが明らかになった。(pp. 225~237)
79. 担癌宿主の栄養学的研究(II) -	共	1986年08月	大阪教育大学紀要第三	上延、萱村、新谷、井上、高木

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
脂質代謝異常に関する二三の知見 — 80. 小児における神経学的minor signs (第2報) 一対照群として、成人の変異と左右差の検討	共	1985年11月	部門35巻1号 大阪市立大学生活科学部紀要1985 (33)	担癌ラット (AH-130) の脂質代謝を調べるために担癌ラットの高脂食飼料群、普通食飼料群および健康ラットの間で各種血清脂質量の比較検討を行ったもの。その結果、担癌高脂食群は健康普通食群に比べHDL以外の全ての項目において増加していること、担癌高脂食群は普通食群に比べ異常相が増幅していることが明らかになった。(pp.101~108) 萱村、坂本、松山 正常成人200名を対象に利き手判定、片足とび、変換運動、指挙上検査を実施し、その成績を、とくに左右差の観点から利き手別に分析したもの。その結果、変換運動に伴う随伴運動は右利きでは右腕、左利きでは左腕、すなわち利き腕に出現傾向が高いなど、利き側によって異なった左右差を示すことが指摘された。(pp.159~170)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 発達神経心理学の基礎研究から教育臨床の場へ	単	2004年03月	日本発達心理学会第15回大会	発達神経心理学の基礎研究を教育臨床の場にどのように適用するかを考察した。
2. 学会発表				
1. 乳児の粗大運動発達に見られる揺らぎ	共	2017年3月26日	日本発達心理学会第28回大会(広島大学), 日本発達心理学会第28回大会抄録集, 343, 2017	萱村俊哉・萱村朋子 乳幼児はある能力が安定するまで、“通過(できた)と否通過(できなかった)”の間を何十回と揺らぐというAdolph et al. (2008)の指摘が追認された。すなわち、To児、Ta児ともに初めて歩行が見られた日から安定的に歩行できるようになった日に至るまでの間、全く歩行しなかった日が単独あるいは連続して認められ、粗大運動発達に揺らぎがあることが確認された。運動発達の開始日だけでなく、その後の揺らぎを観察することにより、個人の運動発達の特性が一層明確にできるのではないかと考えられた。
2. 5歳児検診における連合運動検査の意義	共	2016年5月7日	日本保育学会第69回大会(東京学芸大学) 日本保育学会第69回大会発表要旨集, 781, 2016	萱村俊哉・萱村朋子 就学前児を対象とした発達障害のスクリーニング検査(5歳児検診)において協調運動検査が実施されることが多い。本発表では、発表者のものを含むこれまでの先行研究を整理し、ともすれば見過ごされがちな協調運動検査でみられる連合運動の診断的重要性に言及した。
3. 子どもの連合運動(associated movements)の臨床的意義	共	2015年9月23日	日本心理学会第79回大会(名古屋) 日本心理学会第79回大会発表論文集372	萱村俊哉・萱村朋子 AM(associated movements)は神経発達の未熟さのサインや神経学的微細徴候であるが、それ以上の診断的意義は判然としない。本研究では、子どもを対象としたAMに関する先行研究を概観し、その発達や臨床的意義について整理して今後の課題を提示した。
4. 離乳食開始前後に何があるのか：運動・行動発達連関の分析	共	2015年5月9日	第68回日本保育学会(椋山女学園大学)	萱村俊哉・萱村朋子 2名の乳児の観察記録(日誌)から、生後1年間の粗大運動発達と離乳を含む食行動発達に関する記述を抽出し、粗大運動と離乳食摂取行動の発達の関係性について比較検討した。結果、匍匐などロコモーションの発達と離乳食の1日2回食開始時期に間に関係があると推測された。
5. 乳児期における粗大運動発達の個人差とその臨床的意義	共	2014年9月10日	日本心理学会第78回大会発表論文集, 999.	萱村俊哉・萱村朋子 日誌法による観察データをもとに、2人の乳児の粗大運動発達の差異や、運動間の連関について分析した。寝返りから匍匐、座位に至るプロセスに2人の間に差がみられた。また、定頭の時期は、匍匐と歩行といった身体の左右の協調を必要とする運動の獲得時期を予測するものであった。
6. 保育・発達心理学における「原始反射」の意味を再考する	共	2014年5月18日	日本保育学会第67回大会発表要旨集(2014), 706	萱村俊哉・萱村朋子 乳児期にみられる原始反射の意義として、①知能発達の基盤としての意義、②生存的意義に加え、③原始反射には身体の機能的統合を実現し、主体的自己を形成するための基礎的役割を果たしているという意義があるとの考えを提示した。
7. 教育と発達臨床の場における「臨床行動観察」	単	2014年3月23日	日本発達心理学会第25回大会(京都)	「反抗的である」とか「ボーとしている」など、子どもの行動から受ける印象をその子にラベリングしてしまうのではなく、個別指導計画立案のために役立つ行動観察とは何かということについて論じた。
8. 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図-ジャクソニズムからの考察	共	2012年9月	日本心理学会第76回大会	萱村俊哉・萱村朋子 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣の機能面での異同について、ジャクソニズム、とくに「自動性と意図」の観点から検討した。
9. 五歳児検診においてもっとも感受性の高い協調運動検査は何か	共	2012年5月	日本保育学会第65回大会	萱村俊哉・萱村朋子 発達障害の早期発見を目的とした5歳児検診において、もっとも感受性の高い協調運動検査は「片足跳び」であることをevidenceに基づいて指摘した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. 1歳児の言語獲得方略における個人差 日誌法による分析 1歳児の言語獲得方略における個人差 日誌法による分析	共	2012年3月	日本発達心理学会第23回大会	萱村俊哉・萱村朋子 日誌法による検討である。2名の1歳代の幼児が言語を獲得する過程で、異なった方略を採用していることを指摘し、言語獲得方略の多様性を論じた。
11. 自閉症ファンタジーの臨床教育学的理解	単	2012年11月	第59回日本学校保健学会	教室で出現する自閉症ファンタジーに対して教員はどのように対応すればよいのだろうか。この発表ではこの点に焦点を当てて考察した。
12. 「子どもの不器用さの意味を問い直す」 -自閉症スペクトラムと発達性協調運動障害-	共	2012年10月10日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所主催講演会	発達障害児にみられる身体的不器用さは子どもの発達を多面的に阻害するため、不器用さに対する早期からの介入が必要であることが述べられた。筆者はコーディネーターを勤めた。
13. 障がいのある子どもや成人の親支援-発達障がいと精神障がいの臨床から学んだこと-	共	2011年9月	文部科学省オープン・リサーチ・センター事業 平成23年度公開シンポジウム	発達障害児の保護者をどのように支援していけばよいのか。このことを、精神障害者の保護者支援の歴史から考察した。筆者はコーディネーターを勤めた。
14. 乳児の粗大運動発達における個人差(3)-移動経験にともなう生活行動の変化-	共	2011年9月	日本心理学会第75回大会	萱村俊哉・萱村朋子 日誌法により2名の乳児の粗大運動発達を検討した結果、移動能力の獲得とコミュニケーション能力の発達とが関連していることを示唆した研究
15. 発達支援学の潮流と課題	共	2011年12月3日	文部科学省オープン・リサーチ・センター事業 平成23年度公開シンポジウム	発達支援の新しい枠組みを提案した。筆者は「発達障害の子の療育-愛着の確立に注目して」と題する実践報告のコメントを行った。
16. 自閉症スペクトラム障害(ASD)における身体図式とファンタジーの相互補完性.	単	2011年10月	第8回子ども学会議学術集会	自閉症スペクトラム障害(ASD)において、身体図式の発達障害が彼ら独自の自閉症ファンタジーを発生させ、また自閉症ファンタジーが身体図式の機能不全を補完しているとの仮説を提唱した。
17. 1歳児の模倣における自動性と意図-ジャクソニズムの立場からの考察-	共	2011年03月	日本発達心理学会第22回大会	萱村俊哉・萱村朋子 1歳児の言語発達について日誌法により検討した結果、親の質問に対し、その質問を即時的に模倣し、その直後に正しい返答をするという現象が一時期観察された。この現象を言語発達の過渡的な反応ととらえ、自動性と意図のせめぎあいという観点でジャクソニズム的に考察したものである。
18. 小学校3, 4年生における人物画とコンピテンスとの関係	単	2010年11月	第57回日本学校保健学会	当該学年の子どもたちの人物画に、自己有能感(コンピテンス)がどのように反映されるかについて検討した。
19. 乳児の粗大運動発達における個人差(2)-匍匐の分析-	共	2010年09月	日本心理学会第74回大会	萱村俊哉, 萱村朋子 日誌法により、匍匐動作獲得プロセスの個人差を素描したもの。
20. 発達障害児の自尊感情をどのように育むか	共	2010年07月	文部科学省オープン・リサーチ・センター事業 平成22年度公開シンポジウム	萱村俊哉, 橋本愛, 本岡真由子 発達障害児の自尊感情を低下させる要因、およびそれを向上させるための支援法について報告した。
21. 女子大学生における人物画の大きさと身体満足度の関係	単	2010年06月	第57回近畿学校保健学会	人物画の大きさに身体満足度がどのように反映するのかを検討した。
22. 乳児の粗大運動発達における個人差(1)-日誌法による寝返り動作獲得前後の分析-	単	2010年03月	日本発達心理学会第21回大会	寝返り動作を獲得するプロセスの個人差について、日誌法により検討したもの。
23. Early development of the Children with autistic spectrum Disorders. Autistic spectrum Disorders: from infancy to Adolescence.	共	2010年	19th World Congress International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions and 6th Asia Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions.	Shirataki, S., Miyaguchi, K. & Kayamura, T. 自閉症スペクトラム児の初期発達における特徴について論じた。
24. 思春期における対側性連合運動の消失に関する発達の検討	単	2009年10月	第50回日本児童青年精神医学会	不随意運動の一種である対側性連合運動が思春期にどのように消失するのか、とくに性差に着目して分析した。
25. 児童養護施設における高機能自閉症スペクトラム障害(ASD)のスクリーニングの課題	単	2009年06月	第56回近畿学校保健学会	児童養護施設におけるASDスクリーニングの問題点について検討した。
26. 人物画と身体満足度及びコンピテンスとの連関についての検討	共	2008年03月	日本発達心理学会第19回大会	萱村俊哉, 萱村朋子 身体満足度やコンピテンスといった自己身体や能力に関わる認知的要因は人物画検査に反映されるのかどうかという問題意識に基づき、小学生, 大学生, 高齢者を対象に生涯発達の見地から探索的に検討した研究である。
27. 発達障害児の療育を考える	共	2008年	文部科学省オープン・リサーチ・センター事業 平成20年度公開シンポジウム(総合司会)	武庫川女子大学 白瀧貞明先生、金沢大学 高橋和子先生をお迎えし、自閉症スペクトラム障害の支援の具体的方法についてのお話をうかがった。筆者は司会及びコーディネーターの役を務めた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
28. 軽度発達障害児の行動理解-神経心理学的視点からのアセスメントと教育的支援-	単	2008年	文部科学省オープン・リサーチ・センター事業 平成20年度公開シンポジウム	教室での「気になる子どもたち」や軽度発達障害の子どもたちの行動を理解し支援する方法について、神経心理学的な視点から解説した。
29. ADHD児における身体図式と実行機能の連関	共	2006年07月	明治安田こころの健康財団研究助成成果報告会	萱村俊哉, 白瀧貞昭, 沖田善光, 杉浦敏文 アスペルガー症候群の所見と比較しながら、ADHD児における身体図式と実行機能の連関について調べ、併せて、ADHD児における検査遂行時の脳波特徴についても検討した研究である。
30. still-face場面における母子の行動分析-4ヶ月齢、9ヶ月齢の縦断的变化	共	2006年	日本心理学会第70回大会	矢藤優子, 河合優年, 萱村俊哉, 根ヶ山光一, 荘厳舜哉 4ヶ月と9ヶ月検診時の母親のstill-face場面において子どもが示す反応を縦断的に比較検討した研究である。
31. Difficulties encountered by the school children with autistic spectrum disorders (ASD) in Japan	共	2006年	ASCAPAP	Shirataki, S. Kayamura, T. & Onishi, J. わが国の小中学校において自閉症スペクトラム児が直面する、制度的な面も含めた諸問題についての概説である。
32. 児童の人物描画の構成方略：その臨床的意義	共	2005年10月	第52回日本小児保健学会	萱村俊哉, 萱村朋子 健常な子どもでは人物描画過程において、定型的な描画方略を適当に崩せるが、発達障害児ではそれが難しいことを論じた。
33. 児童期における人物画の構成方略の発達	共	2005年03月	日本発達心理学会第16回大会	萱村俊哉, 萱村朋子 小学校の2、3、5年生の児童77名を対象に人物画検査を実施し、構成プロセスをVTRに収録。そのプロセスの発達の变化を検討した。
34. 高機能広汎性発達障害児にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究	共	2005年	厚生労働省科学研究補助金こころの健康科学研究事業平成16年度報告会	白瀧貞昭, 大西次郎, 村上凡子, 萱村俊哉 高機能広汎性発達障害児を早期発見するための基礎研究である。
35. 高機能広汎性発達障害児における表情理解と表出	共	2005年	第46回児童青年精神医学会	吉川裕美, 白瀧貞昭, 萱村俊哉 高機能広汎性発達障害児における心の理論課題、表情理解課題の成績を健常児のそれと比較した研究である。
36. Rey-Osterrieth複雑図形の模写における正確さの発達：実施方法の違いによる検討	共	2004年11月	第51回日本小児保健学会	萱村俊哉, 萱村朋子 小学校の1～3年生の児童136名を対象に、複雑図形の模写における正確さの発達について分析した研究である。
37. 8～12歳児の対側性連合運動における性差	単	2004年03月	日本発達心理学会第15回大会	対側性連合運動 (Contralateral Associated Movements; CAM) の消失のピーク年齢にあたる8～12歳児の右手利き児268名と非右手利き児25名を対象にdiadochokinesis (上肢の変換運動) を実施し、CAM消失における左右差と性差について検討した。その結果、男子よりも女子の方がCAMは1年早く消失することが明らかになった。
38. 軽度発達障害児における「構成機能」	単	2004年	日本心理学会第68回大会	アスペルガー障害、ADD、非言語性LDの症例に基づき、軽度発達障害の神経心理学的アセスメントの方法について論じた。とくに「構成機能」に着目することの意義について指摘した。
39. 高齢者における模写時の構成動作の分析	共	2003年09月	日本心理学会第67回大会	萱村俊哉・萱村朋子 痴呆性疾患をもつ高齢者12名と健常な高齢者18名 (全員女性) を対象に、複雑図形の模写課題検査を施行し、模写時の企画様動作の生起について比較検討した。その結果、企画様動作の生起率は両群間で差はなかったが、健常高齢者では企画様動作が多く出現する者ほど模写の正確さが低下したのに対し、痴呆症患者ではその逆の知見が得られた。このことより、企画様動作の機能が両群間で異なっている可能性を指摘した。
40. 複雑図形の模写と再生における自閉症者の動作	共	2003年03月	日本発達心理学会第14回大会	萱村俊哉・萱村朋子・川端啓之 複雑図形を模写したり再生したりする場合に自閉症者ではどのような動きが出現するのか。本研究はとくに「企画様動作」に着目してこの点を探求し、自閉症者の問題解決過程における身体動作の役割について検討したものである。
41. 複雑図形の模写と再生における構成動作の分析	共	2002年03月	日本発達心理学会第13回大会	萱村俊哉・萱村朋子 小学生65名を対象に複雑図形の模写と再生を行わせ、遂行時の動作特徴を分析した。
42. Block Design Testの構成におけるラテラルティ -とくにDichotic Listening, 左右弁別困難との関連について-	共	2001年11月	日本心理学会第65回大会	萱村俊哉・吉崎一人 大学生34名に対し、コース立方体組み合わせテストを実施し、課題遂行中の動作的左右差を調べるとともに、それと言語優位大脳半球、左右弁別困難との関連について検討を加えた。
43. 手指触認知検査の発達における左右差	単	2001年09月	第25回日本神経心理学会	5～7才及び10～12才の小児97名を対象に、Two-point, In-between, Finger Naming の3種類の手指検査を実施した。その結果、Two-point 及び In-between

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
44. 就学前児の協調運動：自己ペースでの遂行における左右差と性差	共	2001年03月	日本発達心理学会第12回大会	en では年齢のみに有意な主効果がみられ、Finger Naming では年齢に加えて性別と手にも有意な主効果がみられた。すなわち、Finger Naming では男子よりも女子の方が、また左手よりも右手の方が正確に回答できることが明らかになった。 萱村俊哉・萱村朋子 就学前児98名に3種の協調運動の臨床検査を自己ペースで遂行させ、運動の正確さ、リズム、associated movementsの多寡を評定し、左右差、性差の有無について検討した。
45. 痴呆性疾患患者におけるRey-Osterrieth複雑図形の構成方略の特徴	共	2000年11月	日本心理学会第64回大会	萱村俊哉・萱村朋子・中迎憲章・元村直靖 軽度～中等度の痴呆性疾患に罹患している高齢者と健常高齢者との間でReyの図検査所見の比較を行い、本検査の有効性について検討した。
46. ボディ・イメージの評価法に関する研究：質問紙法と描画法の比較	単	2000年11月	第47回日本学校保健学会	大学生148名を対象に2種類のタイプの異なるボディ・イメージ検査を実施し、両検査の評価結果を比較検討した。
47. 健常者における手指触認知検査の通過率と左右差	単	2000年09月	第24回日本神経心理学会	手指失認検査の正常範囲や特性について、大学生を対象として検討を加えた。
48. 自閉症青年におけるRey-Osterrieth複雑図形の特徴	共	2000年03月	日本発達心理学会第11回大会	萱村俊・萱村朋・川端 知的障害のある自閉症青年を対象に、Rey-Osterrieth複雑図形検査を実施し、その認知特性について検討した。
49. 大学運動部員におけるボディ・イメージと性役割観	共	1999年11月	第46回日本学校保健学会	萱村・駒井・黛 ①大学運動部員は一般学生と比べ、ボディ・イメージや性役割観においてどのような特徴を持っているのか、②ボディ・イメージと性役割観との関連性は運動部員と一般学生の間で異なるのか、の2点について質問紙法により検討した。
50. 会話における自己接触動作の左右差	単	1999年09月	第23回日本神経心理学会	会話中にみられる動作は、右利きの場合、左手より右手の方に多く出現するが、自己接触動作にはその様な左右差がみられないというKimura (1973) の研究結果の再検討である。
51. 両側性協調運動の発達に関する研究	単	1999年09月	日本心理学会第63回大会	健常児213名を対象に3種類の両側性協調運動検査を実施した。鏡映と非鏡映の2条件で行わせ、その発達プロフィールや性差について検査間、条件間で比較した。
52. 高齢者におけるRey-Osterrieth複雑図形の構成方略	共	1999年03月	日本発達心理学会第10回大会	萱村俊哉・萱村朋子・小寺清孝 Reyの図検査を用いて高齢者の構成能力の特徴を分析し、その所見を大学生や小学生のものと比較することにより構成能力の加齢変化について検討した。複雑図形を合理的な手順で正確に模写する構成能力は、大学生や小学生に比べ高齢者の方がむしろ優れる傾向にあった。高齢者で顕著に空間記憶能力が低下するが、その原因を構成能力の問題に求めることは困難と考えられた。
53. アマチュアレスリング教室に通う幼児の協調運動能力の特徴	共	1998年11月	第45回日本学校保健学会	萱村俊哉・西牧真理・西牧慎吾 幼児期のレスリングによるトレーニングが発達の諸相に及ぼす影響を検討する目的で、アマチュアレスリング教室に通う幼児の協調運動能力を一般児のそれと比較した。その結果、heel toe tappingはレスリング群の方が優れていること、ラテラルティと協調運動との関連について再群間に差はみられないことなどが判明した。
54. 人物画における性差の表現に関する発達の・比較文化的研究	共	1998年10月	日本心理学会第62回大会	萱村俊哉・川端啓之 日本とネパールの子どもの人物画を比較した結果、①ネパールの10歳以上の女子では自分とは反対の性別の人物画から描き始める傾向があること、②服装や装飾品による性差の表現は日本の男子よりもネパールの男子の方が優れていること、③ネパールの方が全体に小さな人物画を描く傾向にあること、などが判明した。
55. 利き手判定質問紙の信頼性に関する研究	単	1998年06月	第45回近畿学校保健学会	女子大学生を対象に、わが国の代表的な利き手判定検査である八田・中塚のテストと、欧米で使用頻度の高いEdinburgh Inventory及びLateral Preference Inventoryを実施した結果、いずれも再検査信頼性が確保されており、質問紙間の一致度も有意であった。
56. 就学前児における随伴運動の信頼性に関する研究	共	1997年11月	第44回日本小児保健学会	萱村、中嶋 Szatmari and Taylor (1984) によって開発されたModification of Fogs' test (MFT) を、幼稚園児を対象に、5カ月の間隔で2回実施し、就学前児における随伴運動の信頼性について検討した。その結果、1) 4～5歳の年中児では随伴運動は安定した指導とは言えないこと、2) 就学前児の場合、MFTによって誘発された随伴運動の強さは年齢や性別の影響を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
57. 幼児における協調運動とlateralityとの関連	単	1997年10月	第44回日本学校保健学会	受けないこと、の2点が明らかになった。 4～6歳の幼稚園児56名（男子29名、女子27名）を対象に、3種類の協調運動検査及びlaterality判定検査を実施した。その結果、左眼・両眼利き児は右眼利き児に比べて、heel toe tappingの成績が有意に低いことが判明した。
58. Rey-Osterrieth複雑図形の模写における正確さと構成方略の発達	共	1997年09月	第21回日本神経心理学学会	萱村、中嶋 小学校2年と5年生（65名）を対象にReyの図の模写課題を実施し、模写の正確さと構成方略の発達について以下の結果を得た。1）5年生は2年生よりも正確さ構成方略ともに優れていた。2）2年生では正確さに女子優位の性差がみられたが、構成方略には性差はみられなかった。3）Section 1の部分の構成方略は5年生の方が優れており、2年生ではこの部分を複数の三角形に分解して描出する傾向がみられた。4）Section 4の構成方略は男子の場合、学年間で顕著に発達したが、女子ではその様な傾向はみられなかった。
59. 協調運動の評価法に関する検討	共	1996年11月	第43回日本小児保健学会	萱村、坂本 5～12歳の健常児177名、大学生58名に対し、3種類の協調運動検査を実施し、時間測定法とスコアリング法の2種類の異なった評価法で評価した。その結果、6、7歳では、これら2つの評価結果の間での相関が低かった。これには課題遂行の際に正確さを追求すると速度が低下し、反対に速さを追求すると正確さが低下する、いわゆるspeed-accuracy trade off現象が影響した可能性が示唆された。
60. Rey-Osterrieth複雑図形の模写及び再生過程の分析	共	1995年09月	第19回日本神経心理学学会	中嶋朋子・萱村俊哉 健常成人30名に対し、Rey-Osterrieth複雑図形検査を実施し、模写及び3分後再生のプロセスをVTRに収録し、分析した。その結果、系統的な順序で模写を行なった群はそうでない群に比べ再生の成績が有意に優れていた。
61. 大学生におけるスポーツ経験とラテラルリティ現象との関係について	共	1994年11月	第41回日本学校保健学会	萱村俊哉・尾原博子 利き手、利き足、利き眼などのラテラルリティ現象がスポーツの経験とどのような関係にあるかという点について、大学生492名を対象に質問紙法により調査した。その結果、スポーツ経験が豊富な学生はそうでない学生に比べ、両手利き、両足利き傾向が強いことなどが明らかになった。
62. 大学生におけるコンピュータ操作の感情とパーソナリティ要因との関連性について：交流分析による検討	共	1994年06月	第41回近畿学校保健学会	萱村俊哉、大崎千波 コンピュータ学習者がコンピュータ操作に対して抱く感情と自我特性などの要因との関係を調査することを目的に、情報処理の授業を1年間にわたって受講した女子大学生103名を対象に、コンピュータ操作に対する感情についての質問紙及び東大式エゴグラムを実施した。その結果、コンピュータ操作を好む・嫌うという感情は自我特性に関係していることが明らかになった。
63. 健常児における協調運動（motor coordination）の発達に関する研究	単	1993年11月	第4回Auxology研究会	6～11歳の右利き健常児177名（男子88名、女子89名）を対象に、微細脳機構障害（MBD）などの検査項目に含まれる協調運動検査を実施し、年齢発達、性差、左右差の観点から分析した。その結果、協調運動検査の種類によって、年齢発達、性差、の現れ方などの点で差異が認められた。この差異は思春期における神経成熟の特性を示唆する所見と考えられた。
64. 大学女子運動選手における利き側に関する研究	共	1993年06月	第40回近畿学校保健学会	萱村・坂本 大学の女子運動選手140名および一般の女子大学生124名の利き側（利き手、利き足、利き眼）について、質問紙法により調査した。その結果、1）女子運動選手は一般の女子大学生と比べ、強く側性化された「右手利き」が少ないこと、2）運動選手の中にとくにクロスト・ラテラルティの頻度が高いということはない、の2点が明らかになった。
65. 抑制機能の成熟からみた人間の発達	単	1992年11月	第30回比較発達研究会	人間の発達について、神経学・神経心理学的側面から、「抑制」をキーワードに解説した。
66. AIDSに関する調査研究—学生、高校生の知的理解と関心度について	共	1989年6月	第36回近畿学校保健学会	後藤・上延・後和・光藤・萱村 大阪府下の高校生1,140名を対象にAIDSに関する知識や関心度の調査を行った。結果、知識と関心度の間に関連があり、関心の低い生徒は関心の高い生徒に比べ知識の正確さが有意に劣っていることが判明した。
67. 青年期における健康問題に関する調査研究（IV）	共	1988年6月11日	第35回日本学校保健学会	光藤・上延・萱村・進 現代青年の健康調査の継続研究である。
68. 青年期における健康問題に関する	共	1988年6月11	第35回日本学校保健学	萱村・上延・光藤・進

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
調査研究(Ⅱ)		日	会	現代青年の健康について、食生活、居住形態などの観点から分析した研究である。
69. 妊娠動物に対する運動負荷が仔の生後における行動と発達に与える影響について	共	1987年6月	第34回近畿学校保健学会	美馬・塩田・萱村・上延 妊娠しているマウスにトレッドミル走行による運動負荷を与え、その仔の生後発達について検討した実験的研究である。
70. 婦人雑誌にみる育児記事の変遷	共	1987年11月	第34回日本小児保健学会	広川・坂本・萱村 市販されている婦人雑誌(主婦の友、婦人倶楽部)に掲載された育児記事について、その第1号から約60年間の変遷を定量的、内容分析的な側面から調べたもの。
71. オランウータンの鏡に対する反応	共	1987年07月	第47回日本動物心理学会	松村・坂本・萱村 大阪市天王寺動物園において親から隔離されたオランウータンの鏡への反応を、生後2カ月から10カ月にわたって観察したもの。加齢につれて反応が多様になったが、10カ月でも自己認知反応は出現しなかった。
72. 青年期における健康問題に関する調査研究(1)	共	1986年11月	第33回日本学校保健学会	上延・光藤・萱村・進 現代青少年の健康意識や保健行動について総合的に調査したもの。
73. 健康小児における Neurological Minor Signs (第3報) -成人の正常限界の検討-	共	1986年10月	第33回日本小児保健学会	神経学的マイナーサイン検査を正常児および成人に実施し、結果を定量的に分析し、マイナーサインの発達の正常域や成熟年齢を検討したもの。
74. 正常小児の利き側と左右差について-神経学的検査を導入して-	共	1986年07月	第33回近畿学校保健学会	萱村・坂本 利き側とマイナーサインとの関わりを小学校児童258名を対象に検討したもの。
75. 健康小児における Neurological Minor Signs (第2報) -左右差の検討-	共	1985年10月	第32回日本小児保健学会	萱村・坂本・松山 神経学的マイナーサイン研究の方法を検討するためのパイロットスタディーとして実施したもの。
76. 妊娠マウスへの運動負荷が仔の発育および行動発達に及ぼす影響	共	1985年07月	第25回日本先天異常学会	妊娠マウス(ICR)に対し1日60分間のトレッドミルによる運動負荷を胎仔の器官形成期を含む時期に実施したもの。その結果、妊娠10~17日に運動負荷された群は対照群に比べて学習能力が優れていた。
77. 胎生期に高温を負荷されたマウスの行動と学習能力	共	1985年07月	第25回日本先天異常学会	妊娠マウス(ICR)に対し、妊娠12~13日目に1日10分間42度または43度の高温負荷を加え、出生仔の生後発育、学習および行動を研究したもの。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 日本臨床発達心理士会第12回全国大会	単	2016年9月10日	日本臨床発達心理士会第12回全国大会 実践研究発表A 児童期(1)	上記発表の座長を務めた。
2. 平成22年度 国内研修(和歌山県立医科大学)成果報告書「注意欠陥/多動性障害(ADHD)を含む発達障害児の発達・行動特性の実態、及びそれらをふまえた心理教育的支援のあり方に関する研究」		2010年		
3. 和歌山県立医科大学医学部衛生学教室博士研究員(内地留学)		2010年		
4. 文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター主催シンポジウム「発達障害児の自尊感情をどのように育むか」主旨説明、指定討論		2010年		
5. 講義ノート: 萱村俊哉・萱村朋子著「身体と運動の発達心理学」講義		2009年		
6. 文部科学省大学教育高度化推進事業「短大における実習を中心とした心理学専門教育体系化の試み」		2008年		
7. 文部科学省大学教育高度化推進事業「短大における実習を中心とした心理学専門教育体系化の試み」		2007年		
8. 文部科学省大学教育高度化推進事業「短大における実習を中心とした心理学専門教育体系化の試み」		2006年		
9. 特別な教育支援の必要な子どもたち 判断指導マニュアル-神戸市教育委員会		2001年		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
10. 感情心理学 ナカニシヤ出版	単	1997年	文部省科学研究費補助金平成5年度実績報告書	
11. 脳機能障害児の神経心理学的研究		1993年		
12. 脳機能障害児の神経心理学的研究 文部省科学研究費補助金平成4年度実績報告書 (04851028)		1992年		
6. 研究費の取得状況				
1. 基盤研究 (C) 継続	共	2008年		アスペルガー症候群の不器用さに関する発達神経心理学的研究
2. 基盤研究 (C) 新規		2007年		アスペルガー症候群の不器用さに関する発達神経心理学的研究
3. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) 新規		2007年		アスペルガー症候群の不器用さに関する発達神経心理学的研究
4. 基盤研究 (C) 継続		2006年		軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究
5. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) 継続		2006年		軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究
6. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) 新規		2005年		軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究
7. 明治安田こころの健康財団研究助成 新規		2005年		ADHD児における身体図式と実行機能の連関
8. 基盤研究 (C) 新規		2005年		軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2011年4月～現在	日本臨床発達心理士会兵庫支部副支部長
2. 2010年9月1日～現在	和歌山県立医科大学衛生学教室博士研究員
3. 2004年4月1日～現在	神戸市教育委員会「こうべ学びの支援センター」専門相談員
4. 2000年4月～現在	学習障害に関する調査研究専門家チーム委員および巡回相談(神戸市教育委員会)
	日本児童青年精神医学会
	日本学校保健学会
	日本公衆衛生学会
	日本自閉症スペクトラム学会
	近畿学校保健学会
	日本小児保健学会
	日本神経心理学会
	日本発達心理学会
	日本心理学会
	日本保育学会